

第十六号

「学フェス」

メルマガ noichi 第十六号。今月のテーマは『学フェス』。

真夏の京都に、全国から邦楽を愛する学生達が集う。

集まろう、繋がるう、楽しもう。そして、みんなで守ろう『学フェス』を！



「高齢化が常に『問題』としてのみ取り扱われていることは、少し残念に思います」

これは以前、皇后陛下美智子さまが仰っていたお言葉です。仰せの通り、我々日本人は高齢化する日本社会を悲観するばかりでなく、長寿国であることを喜び、何時も年長者を敬う『長幼の序』を忘れてはいけません。しかし、高齢化が進む我が邦楽界は一時代の繁栄を築いた家元制度の在り方が、そろそろ見直しを迫られていることは誰の目にも明らかで、伝統芸能の世界も、さらなる発展、存続の為に『多くの若者が関心を持たない』という現実を、真摯に受け止めねばなりません。

しかし、そんな中…と言っては彼等に失礼かもしれませんが、今、邦楽の道を志さんとし、楽しんで箏や三絃を勉強してくれる沢山の若者が年に一度、真夏の京都に集まっていることは、知る人ぞ知るところ。そう。それが全国学生邦楽フェスティバル、略して『学フェス』です。主催者の非営利団体『えん』を中心に実現した『学フェス』も今年の八月で重なること十八回、年々参加者が増え、その若さと熱気から邦楽の甲子園と称されることもあるそう。しかし、その血気盛んな『学フェス』が存続の危機にあるようです。原因は結局、準備に充てる主催者側の膨大な仕事量がネックとなって、年を追うごとに主催者の疲労、心労が募り、経済的な問題も追い討ちをかけてしまっているようです。私はそのことを、八月末、『えん』からの一通のメールで伺い知りました。邦楽界の将来を担う若者の象徴的イベントがなくなってしまうのは一大事と思ひ、微力ながら、急遽当方メルマガで『学フェス』を取り上げることとし、一人でも多くの方に『学フェス』の存在、意義を知って頂きたく制作してみました。

メルマガ noichi では、この度『学フェス』に関しますご意見、ご感想、ご提案など広く募集させて頂きます。mailmagazine@utanoichi.jp に、気軽にお寄せ下されば、編集部一同幸いに存じます。

全国で最大の若者による邦楽の祭典

全国学生邦楽フェスティバル実行委員長 伊藤 和子

「集まりましたよ 楽しみましょう」のみの趣旨で一九九二年から開催し、今年は十八回目になり、参加者は四十七校の大学邦楽部の現役とOBで、二八〇人参加でした。二日間、若者は邦楽に燃え、会場中の熱気は爽やかで、学フェスを見ていると邦楽は熱いと感じます。今では、邦楽の甲子園と学生達は言い出しています。主催は、邦楽以外の人で成り立つ小さな非営利の邦楽普及団体「えん」です。学フェスの内容は「講習会」、プロによる「鑑賞会」「若者による邦楽コンサート」「交流会」「無料尺八・三味線クリニック」、各大学クラブへの楽器の寄贈等、沢山の催しを二日間で行います。運営費用は参加費のほか、各種の助成金などで賄い、残りの赤字は私も協力して賄ってきましたが、現在は、法然院の梶田真章貫主様より楽器の寄贈その他で多大なご支援を賜り、また、毎年たくさんの方々のご協力くださって学フェスが開催されています。

近年、邦楽人口は益々高齢化し、若者が減ったと言われている中で、学フェスは、十八回に亘ってじわじわと参加者が増え続けました。それは何故でしょうか。その理由を突き詰めれば、邦楽人口の拡大に繋がるのではと思います。学フェスの参加者は増え続ける中、「えん」は年を取り、企画・準備、当日の進行：と全てに尽力した私に負担がかかってしまい、遂に今年は体力的にギブアップ。今後について真剣に考えないといけない時期になりました。私は数年前より、この状況を危惧し、各方面にご支援をお願いして参りましたが、「伊藤さんしか出来ないこと。頑張ってください」とお声を掛けて頂くばかりで、「頑張ってください」が無責任な言葉に聞こえてしまいます。ひとまず、来年は一度お休みをし、今後の「学フェス」開催については、ゆっくり考えたいと思います。最後になりましたが、この二十年間、「学フェス」を助けてくださいました多くの皆様方に、心より感謝申し上げます。

◎学フェスに参加して

思えば、私が今の団体に所属するきっかけになったのは去年の学フェスでした。たまたま友人が出る学フェスを観に行つて、大学に入ってから何となく疎遠になっていたお箏に触れなくなり、箏曲研究会に入会。その私が、今年は会を率いて学フェスに参加することになりました。

全体曲に加え、昨年の学フェスで知り合った方のお誘いで、個人的にもう一曲演奏することになりました。合奏メンバーのほとんどが初対面のこの曲は、初演ということもあり、難しい部分もありました。しかし、お互いの関係を含め、一つの曲を創り上げていくという合奏の面白さ、奥深さを感じました。練習を重ねる中、演奏面

はもちろんのこと、邦楽に対する姿勢や考え方から新鮮な刺激を受けることもできました。

これまであまり同年代の仲間といった横の繋がりがなかった私ですが、この曲を通じて、大きく世界が広がりました。貴重な機会を与えてくださった学フェスに心から感謝しています。

東京大学箏曲研究会 上林 千紗

○

私の属するサークルは、おそらくもう何十年も他大学の交流を持ちません。他を知らないということは、自分と

他との違いを知らないということではないか、自分のサークルがどれほどに狭くて非効率な伝統に縛られているものなのか、と強い危機感を募らせていました。

そんなときSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス、「LINE」等）を通じて知り合ったのが大谷大学邦楽サークルの女性でした。彼女と、学フェスに出ようと決めました。私は自分の大学から参加を渋る三人の部員を半ば強引に引っ張り出し（笑）、関東三校関西三校計十二名のチームを組んで若者コン（『若者による邦楽コンサート』）に臨みました。

学フェスでの演奏や交流会を通して、多種多様な演奏会の仕方や楽器との向き合い方を知り、楽器に対する熱意を持つ人々と出会いました。そのおかげで、『外の良いものを取り入れなければならない』ことと同時に、『独自の色を付けなければならない』と強く感じました。

学フェス後、部員から、「楽しかった」「もっと練習しないと」「また参加したいな」という言葉を聞いた時はホッとしました。このような機会を得ることができ、感謝しています。

首都大学東京三曲会 小林 育恵

○

夏真っ盛りの八月、私は全国学生邦楽フェスティバルに初めて参加しました。講習会、鑑賞会、若者による邦楽コンサートなど全ての行事に参加しながら当日スタッフとしても働いたため、学フェスの二日間は非常に忙しく、しかし多くの貴重な体験ができた二日間となりました。



私は京都で全国の方を迎える側として、交流を楽しんでいただくお手伝いをしたいという思いからスタッフを希望しました。実際にスタッフを行い、二百人を越える参加者がいるイベントならではの運営の大変さ、交流することの難しさを感じました。一番印象に残ったのは全ての参加者の力で作りあげていく学フェスのあり方です。様々なイベントを通し、積極的に邦楽を学び交流する中で価値観を広げたいと思う学生。そして、それを広い心で受け止めてくださる先生方、主催者の方などの協力があることで、参加者の意識次第でより質の高い体験ができると感じました。大きな集団になると多くの手間や問題も起こりますが、その分学生に出来ることもより一層広がっていく、そんな学フェスならではの可能性を感じた二日間でした。

熊谷大学邦楽部 多田 美幸

同世代の人たちと一緒に演奏したり、邦楽について語り合ったりする場を求め、学フェスに参加させていただくようになり、今年で三回目となりました。夏といえば学フェス！と言えるほど、毎年ワクワクドキドキした気持ちで参加しています。

学生の私たちにとつての一番の悩みは旅費と宿泊費。今年は遂に青春18きっぷを使い四時間の電車の旅、バックパッカーが多く利用するホテルに泊まり、食事はコンビニのおにぎりで演奏する若者による邦楽コンサートでは、現代曲を演奏する学校が圧倒的に多く、普段耳にすることのない曲を沢山聴くことができるので、新鮮な気持ちになります。毎年楽しみにしている先生方による邦楽鑑賞会、今年は『浮舟づくし』、本場に素敵でした。素晴らしい演奏を間近で観て、聴くことができるなんて本場に贅沢です。さらに、交流会では仲間や

先生方と楽しく邦楽談義ができるのも大きな楽しみです。沢山吸収して、刺激を受けて、仲間を作れる、それが学フェスです！

この様な活動を通じて、もっともつと邦楽が広まれば良いと思います。

くらしき作陽大学日本伝統芸能専修

亀川 真理

二〇〇五年の夏。「学フェスにエントリーしたから」先輩に突然そう伝えられ、私と学フェスの関わりが生まれまし

た。それから七年、私は毎年学フェスに参加しています。いまなお学フェスに参加するのは、そこに「えん」があるからです。

二〇〇七年の学フェスに、関東と関西の学生の合同曲「東京都府」で参加しました。学フェスで知り合った学生が、演奏をともにする。お互いに仲間を増やし、更に交流し、「えん」をつなげていく。曲は学フェスで指導いただいている池上眞吾先生に作っていただきました。「東京都十京都府」というこの曲は、関東と関西の「縁（えん）」の結晶としてこれ以上ない曲でした。ここで生まれた繋がりは、今もずっと続いています。

学生邦楽という狭い世界で、つながりを大きく広げてくれたのが学フェスでした。学フェスは「えん」を合わせる場なのです。学フェスがこれからも多くの「えん」を生み出していくことを期待しています。

同志社大学邦楽部OB 山根 直



◎あとかぎ◎

まだ小さかった娘を連れてヨーロッパに旅行に行った時、外国人の子ども連れの自分たちまで見守ってくれているような雰囲気を感じたことがある。特にロンドンでは、アジア人に対しても白人に対しても同じ様に優しい感じで、イギリス人のイメージが変わってしまったくらいだった。一方、東京では子ども連れの肩身がせまい。最近では、電車の中ではベビーカーをたたむべき、なんて論争もあるくらい。

日本の未来予測はどれも暗い話ばかり。五十年後には納税する人と年金生活者が同じくらいの人数になって、一人当たりGDPが韓国の半分になるとか、先進国ではなくなるとか、7から脱落しているとか。その最大の理由は少子化なのに、子どもを増やす気がないのは困ったものだ。それに今のままだと年寄りには迷惑な存在になってしまう。じいちゃん子として育った身としては、老人と子どもが近くにいて、幸せに生活できる社会になってほしいと願うばかり。

グラフィックデザイナー (http://www.1938.jp) みやはらたかお